〝シャンシャンシャン、ドンツクドンドン〟軽妙なテンポで、若者は郷土芸能に情熱を傾むける。
「神々の戯れ」は、人々を見知らぬ神話の世界へと誘う。

郷土づくりへの参加

長陽村の場合

神々の心を慰め、人々の長命を祈って行われる郷土の民族芸能の一つ、「岩戸神楽」が、阿蘇郡長陽村の長野阿蘇神社で行われました。

「若い者たちが、子供の頃からこの神楽に親しみ、よくがんばってくれるので安心です。」と、村の神楽保存会長・飛瀬孝さん(77)が誇らしげに語ってくれたとおり、ここでは、青年を中心に小・中学生25人が保存会員として、貴重な国指定の〝伝統の舞い〟の練習に励んでいます。

寛政年間の建築で彫刻美を誇る本殿をもつ神社の拝殿では、全幕・33座からなるせりふなき長編オペラ劇が、夜を徹して繰り広げられます。

笛・太鼓の単調だが、壮厳なリズムに合わせて舞う大人達に交じって、いかにも楽しそうに又、誇らしげに「子供神楽」が軽妙なテンポでこの伝統芸能を舞い続けます。この日

だけは、いつもの就寝時間も、受験勉強も忘れて、神楽に打ち興じます。

夜も深まった阿蘇・南郷谷の一隅、周囲八㌔余りの「夫婦桧」が見下ろす境内には、秋の収穫を終えた村人たちや、神楽愛好家たちが、寒さも忘れ、伝統の舞いに遠い太古の世界へと誘い込まれていきました。

この岩戸神楽の起源は古く、旧長野城主越前守の孫長野九郎左衛門が諸国を巡回して各地の神楽、宮中雅楽や伊勢神楽のエッセンスを集めて組み立てられ、元禄15年頃現在の一つの型としてまとまり現在に伝えられています。

昭和49年には、国の無形文化財に指定され、県下でも折り紙つきの神楽です。